



「見たり、聞いたり、探ったり」No.316

通算 No.467

青 木 行 雄

神戸・北野町山本通り

「風見鶏の館」(旧トーマス住宅)

「国重要文化財」(歴史的建造物の魅力を探る)

2026年5月、今から31年前の1995年(平成7)1月17日朝、阪神・淡路地域を襲った大地震で神戸の洋風建築物も大きな被害を受け、地区内の伝統的建造物の多くが被災した。特に、煉瓦積煙突を持つ洋風建築物の被害が大きかったというが、建物の倒壊や火災により焼失したものはなく、復旧支援制度の充実、文化庁や多くの機関、団体の支援、所有者の方々の御理解を得て、保存修理を行うことが出来たという。

そういえば30年程前、一世を風靡した「男はつらいよ」の映画の中に「寅次郎」が神戸の被災地でボランティアをやっている時、当時の総理大臣、我がふるさとの首相、村山富市氏が、被災地にあらわれて、寅次郎とやりとりする場面があったが、強烈な印象が私の脳裏に残っている。

ここ神戸のまちは、六甲山という恵まれた自然を背景に、世界に開かれた港をもつ、明るく開放的で異国情緒豊かな一面を持つ近代都市として知られている。今から約150年前の1868年(慶応3)1月諸外国に向けて港を開いたことに由来する。

ここ北野町、山本通りのある山手一帯は緩やかな南斜面の見晴らしのよい田園地帯であったというが、早くから住宅地として外国人たちに注目され、明治初年から住宅が建てられた。本格的な外国人住宅地として発展するのは明治20年頃からで、第二次世界大戦まで、この辺りには200棟以上の洋風建築物と和風住宅が建ち並び、独特の雰囲気のある住宅地であったという。



正面から見る、リフォーム完成後の「風見鶏の館」。神戸の煉瓦壁の建物を代表する外国人住宅である。



正面入口の看板。NHK1977年10月よりテレビドラマ視聴率38.3%とある。

それが大戦による戦災や、戦後の経済成長の余波、さらに老朽化によって、多くの洋風建築物が消滅したが震災前には約80棟が残っていた。震災後さらに数を減らしたが、残っている洋風建築物は、それぞれ個性的な建ち姿をみせ、今なお異国情緒豊かな当時の面影を残している。

神戸の洋風建築物の特徴は、一つ一つの建物の意匠や色調が全部異なっていて、現在の機能本位の建物では味わえない、ゆとりのある空間に見られる。そして古びた洋風建築物に寄り添うようにして立つ年輪を重ねた樹木の緑陰が、心地のよい空間を創り出している。

このように和洋混在する町並が評価され北野町・山本通地区は、1980年(昭和55)国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

今では神戸、北野町山本通りの代表的な存在になった「風見鶏の館」に^{たち}立より、各部屋を見ながら、明治時代にトーマス氏が自宅として使われたありし日の思いにふけて見て廻った。

この館はかつて神戸に住んでいたドイツ人貿易商ゴッドフリート・トーマス氏が自邸として1909年(明治42)頃に建てた建物という。

この地区に現存する洋風建築物の中で、煉瓦壁の建物としては唯一のもので、色鮮やかな煉瓦の色調、石積みの玄関ポーチ、2階部分の木骨構造など、他の洋風建築と異なった重厚な雰囲気をもっている。



1階の書斎のレトロな机とイス。



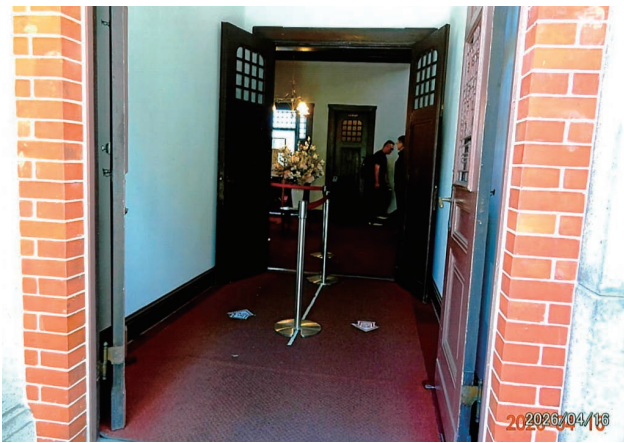
出窓になっている、1階の書斎の部屋。



1階の食堂、中世の城館風意匠が取り入れられている間、広々とした部屋である。



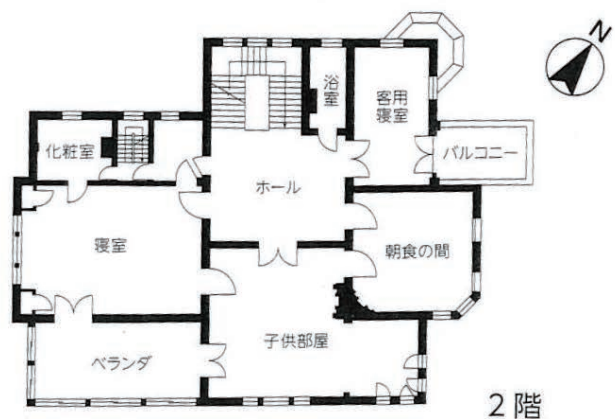
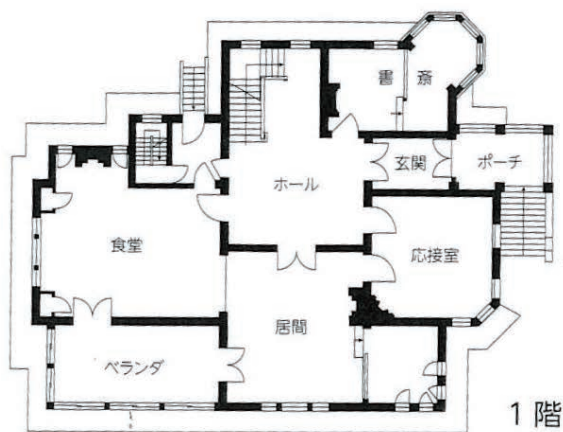
1階の食堂、居間へ続く。



入口の玄関、煉瓦壁が積まれ、色鮮やかな色調。見学者の為に入口と出口に別れている。



室内の壁にトーマス夫妻の写真が飾られていた。



「風見鶏の館」の平面図。

また屋根の上に立つ風見鶏はよく知られ、今では北野町の象徴として欠かせない存在になった。

風見鶏はその名の通り風向きを知る役目をもっているが、雄鳥は警戒心が強いことから魔除けの意味や、キリスト教の教勢を発展させる効果があるといわれていた。

この館は、平面図のように1階に玄関ホール、応接間、居間、食堂、書斎があり、2階は、夫妻の寝室、子供部屋、客用寝室、朝食の間などがある。室内の意匠は部屋によって変えているが全体にドイツの伝統様式を採り入れながら、19世紀末から20世紀初頭にかけての新しい芸術運動(アール・ヌーヴォー)の手法を感じさせると言われる。1階各入口扉に付いている把手金具に、アール・ヌーヴォー風の装飾がつき、玄関ポーチの柱頭飾り、応接間のシャンデリア、書斎腰板の風刺画などにその傾向がうかがえる。また食堂は中世城館風の天井小梁、飾り戸棚、暖炉飾りなど見ごたえのある意匠をみることが出来る。

建物の設計に当たったのはドイツ人建築家ゲオルグ・デ・ラランデという人で、明治30年代後半から大正初期にかけて日本で活躍した有能な建築家だったという。

トーマス氏は1871年(明治4)ライン川沿いのドイツ・コブレンツの町に生まれ、1891年(明治24)20歳の若さで来日し、最初は横浜、ついで神戸で貿易商として成功した。トーマス氏とクリステル夫人との間には一人娘エルゼさん(1899年(明治32)12月横浜生まれ、(のちカルボー夫人となる))があり、彼女が14歳までこの家に住んでいた。1914年(大正3)エルゼさんが本国の学校に入るため一家でドイツに帰国後第一次世界大戦が始まり、再びこの館に帰ってくることはなかった。

その後、時代は変遷し、1978年(昭和53)7月、神戸市がこの館を購入したが、その1年後の1979年(昭和54)4月娘のカルボー夫人が、65年ぶりに来日、懐かしい生家に里帰りした。

その後この館は、1983年(昭和58)より2年程かけて本格的に保存修理を行なった。そして、その後阪神・淡路大震災に遭い、冒頭の修復によって現在にいたる。新装の住居、建築に興味のある方は探訪の価値があり、是非必見を一。

2026年(令和8)5月6日記